はじめに

戦争中、見習士官をしていた時のことである。私は右眼を失明し、左眼もいつ失明するかも知れないという状態に陥り、軍医から、「軍人として失格だから、兵役を解除する」と言い渡された。私は職業軍人ではなかったが、日本男子として、郷里の人々に対して顔向けが出来ないと思い、泣いて軍医に頼み、兵役にとどまることを許された。

しかし、海軍の特攻隊長として内地を出発する直前になり、「いつ盲目になるかわからぬ者を外地に指揮官として出すことは出来ない」という理由でその任務を解かれ、航空本部の副官に任ぜられ、そして終戦を迎えた。

復員して母校の高等学校の教師となったが、良い教師となるためにはまず中学を熟知しなければならない、と考えた私は中学の教師になった。ついで、指導主事になったが、小学生を自分で直接指導した経験がないのに、小・中学校の先生を指導する矛盾に耐えられず、いやそれ以上に、「小学生を指導したい」「小学校そのものを知りたい」という欲求に駆られ小学校の教師に転じた。

そして現在は、それよりも幼い幼児たちを直後指導することを主な仕事としながら、大学生にも講義を行なっている。従って私は、幼児から大学生に至るまでの、小・中・高等学校のすべてにわたり、直接指導した経験を持っていることになる。

なお、指導主事として、小・中・高校の教師たちに指導助言を与えるという特殊な経験を持ち、また、海外教育視察団の団長として、六回にわたって欧米諸国を歴訪しており、管見ではあるが外国の教育の実際をこの目で直接見ている。

こういう広範囲にわたる体験から、私は、言いたいことをあらゆる面に数多く持っている。しかし、ここでは紙数の都合もあり、根元的な病弊と思われるものだけについて述べることにした。具体的な問題については、別の機会に譲ることをお許し願いたい。

私は、敗戦を知った時、この戦争に生き残った者の責務として、日本の弥栄を信じて死んで行った戦友に代り、敗戦日本を建て直すべき若者たちを育てる仕事に身命を捧げなければ相済まぬと考え、そのことを心に固く誓った。

私は、この筆を執るに当たって、再びその誓いを新たに思い起こした。筆は拙いが、気持だけは純粋であると受け取っていただきたい。